「瞰鬼」訳註

― 石川鴻斎『夜窓鬼談』（上）より ―

牛尾弘孝
（大分大学教育福祉科学部国語科教室）

【要旨】　幕末から明治・大正にかけての漢学者石川鴻斎（一八三三―一九一八）の怪異小説『夜窓鬼談』については、国立国会図書館の上下二巻二冊の活字本で見ることができる。文章は漢文で書かれているが、題材は例外を除いてすべて日本に取られている。その意味では和漢文学の比較研究の対象として取りあげるには恰好の作品だと言ってよい。そこで本稿では、牛尾（漢文学担当）と田畑（国文学担当）とが協力して、全文に現代語訳・訓読・註を施すことにした。前号に引き続き、今回は第三回目として、「瞰鬼」を扱ったが、主に牛尾が担当し、田畑は助言・協力にとどめた。底本の紹介および凡例は、第一回目（本誌第一九巻第二号、一九九七年十月）を参照されたい。

【キーワード】　夜窓鬼談　鬼　狐　狸　怪

3

瞰鬼（かんき）（うかがうおに）

東京人家稠密[1]、地租尤貴。構屋者、多作層[2]楼。有一巨商、新造三層高[3]厦。疊甎[4]為壁、鋳銅為屋。宋桷店楔、尽択良材。窓櫺檐欄、具極雕[5]画。帷屏榻卓之属、皆擬洋風。華瓶・暖炉、時[6]辰盤・玻[7]璃灯之属、尽[8]善尽美、最競新規高価之品。竣[9]功之日、集親族朋友及工匠之徒、大開盛[10]讌。既[11]卜昼又卜夜、華灯[12]煜煜、明及四隣。

主人倦賓不[13]勝杯杓、憑欄迎涼。有物不審其形、如向主吹[14]気。主人初甚訝之、把燭照之。竟無所見、以為猫児将窃食也。返坐黙爾如有所思。客薦杯曰、「何鬱[15]陶不娯、請発一唱」。主人俄然命婢曰、「堂上稍覚寂索、遽招芸妓百指来。肴[16]核稍少、命廚人尚使割新鮮」。於是絃歌沸騰、客皆脱衣而踊。婢僕僉怪、「主人平素慳悋、今日何如此嬌[17]泰也」。

有物又向一客吹気。主人見之、又照燭索之、無蹤跡矣。主人意忌之。客勃[18]然罵曰、「偶築屋設讌、何不竭敬客之儀。肉皆腐矣、酒亦濁矣。絃声聒耳、灯火遮眼。堂宇如円盤、運[19]転使人煩悩」。忽把磁盤擲主、誤傷其額。主人大怒、「汝老[20]饕尚為不足耶。不足即啖之」、堅拳批頬。衆遮之、再以樽撃之、歯折唇破、暈[21]絶而倒。客皆怒、乱拳撃主。主有膂[22]力、狂躍与衆闘、砕皿毀盤、覆火[23]炉折灯[24]台。歓娯之筵、変為闘争之場。忽有巡吏、尽拘之。数月不決、以主傷客出金贖之。其妻歎夫之見拘、悩神而病、累月不起。其子時[25]父不在家、留連妓院不還。遂購一婦、隣坊構宅居焉。偶輸貨物于他邦、船遭颶風転覆、沈没数千金。傭夫偸金逃亡、小厮窃衣食而去。自是家産日衰、亡幾巨室為他人之有矣。

有一老僕、歎主家衰滅、将挽回旧業。聞東[26]台山下有術[27]者、能知将来、所言如指[28]掌、則往問之。術者曰、「余、盛会之夜、偶過其門。見一鬼[29]自牖入、是謂瞰鬼。『高[30]明之家、鬼瞰其室』、是也。既一為鬼所瞰、雖遅速不同、不衰且滅者少。夫人生各有天分。過分必招禍、欲全必欠。所謂人世欠[31]陥世界也。物安可全乎。古之

人、為屋不成三瓦而陳之。懼完全也。今之人、得(32)勢則勝天、不知天定而勝人也。聞、欧州富豪、造家皆用堅牢不燃之質、三層或五層、及七層八層、至於人力所極止。而災厄之多、以英之龍動為最。欧人精於物理、(33)而未知物理之外、(34)別有微妙天理也。子不見高野大師築堂之法乎。門楼殿宇、都嫌崇高、宋桷檐欄、亦去(35)雕(36)絵也。而千歳之久、免災厄(37)巍然存者、順天理修造焉也。如彼東寺、(38)屢罹兵(39)燹。然於大(40)師之堂遂不捐一瓦。修造得宜也。明(41)暦之災、幕府亡五(42)層城楼。新(43)井白石献議遂不再造焉。雖将軍之家、不世々生全福之人也。主与室不称、則招禍之本。況賈人得一時暴富、欲居室飲食与王侯貴人同等乎。不(44)懼天理不(45)省吾身、為鬼所瞰亦宜哉。子還勧主、卜一(46)矮陋之居、(47)専節倹宗勉強、不貪多利不欺来客、又応復先業。若行反之、不能再出於世」。僕唯々而退、与主謀如術者之言。数年之後復旧云。

夫徳(48)有吉有凶。吉人(49)為吉徳、凶人為凶徳。鬼亦然。吉鬼護吉人、凶鬼助凶人。然凶不勝吉。吉鬼所護、凶鬼不得瞰之。(50)阿房之宮、望(51)仙之閣、非吉鬼所棲息也。

東京は人家(1)稠密にして、地租尤も貴し。屋を構うる者、多くは(2)層楼を作る。一巨商あり、新たに三層の(3)高厦を造る。(4)甎を疊んで壁と為し、銅を鋳て屋と為す。宋(5)桷店楔、尽く良材を択ぶ。窓櫺檐欄、具さに(6)雕画を極む。帷屏榻卓の属、皆洋風に擬う。華瓶・暖炉・(7)時辰盤・(8)玻璃灯の属、善を尽くし美を尽くし、最も新規高(9)価の品を競う。(10)竣功の日、親族朋友及び工匠の徒を集め、大いに(11)盛讌を開く。既に昼を(12)卜し又た夜を卜し、華灯煌々として、明四隣に及ぶ。

主人は賓に倦みて(13)杯杓に勝えず、欄に憑りて涼を迎う。物ありてその形を審らかにせず、主に向かいて(14)気を吹くが如し。主人は初め甚だこれを訝り、燭を把りてこれを照らす。竟に見る所なく、以為えらく猫児将に食を窃まんとするなりと。坐に返り黙爾として思う所あるが如し。客、杯を薦めて曰わく、「何ぞ(15)鬱陶として娯まざる。請う、一唱を発せよ」と。主人、俄然として婢に命じて曰わく、「堂上は稍寂索を覚ゆ。遽に芸妓百指を招き来たれ。(16)肴核稍少なければ、廚人に命じて尚お新鮮を割か使めよ」と。是に於いて絃歌沸騰し、客は皆衣を脱ぎて踊る。婢僕僉怪しみて、「主人は平素慳悋なるも、今日何ぞかくの如く(17)嬌泰なるや」と。物ありて又た一客に向かいて気を吹く。主人これを見て、又た燭を照らしてこれを索むるも、蹤跡なし。主人、意にこれを忌む。客、(18)勃然として罵って曰わく、「偶たま屋を築きて讌を設くるに、何ぞ敬客の儀を竭くさざる。肉は皆腐れり、酒も亦た濁れり。絃声は耳に聒しく、灯火は眼を遮る。堂宇は円盤の如く、運転して人をして煩悩せしむ」と。忽ち磁盤を把りて主に擲ち、誤って其の額を傷つく。主人は大いに怒り、「汝、(20)老餐にして尚お足らずと為すや。足らざれば即ちこれを啖え」と、拳を堅めて頰を批つ。衆、これを遮らんとするも、再び樽を以てこれを撃ち、歯は折れ唇は破れ、(21)暈絶して倒る。客皆怒り、乱拳もて主を撃つ。主に(22)膂力あり、狂躍して衆と闘い、皿を砕き盤を毀ち、(23)火炉を覆し(24)灯台を折る。勧娯の筵、変じて闘争の場と為る。忽ち巡吏ありて尽くこれを拘す。数月も決せずして、主は客を傷つくるを以て金を出しこれを贖う。其の妻は夫の拘せらるるを歎き、神を悩まして病み、累月も起たず。其の子は父の、家に在らざるを時として、妓院に留連して還らず。遂に一婦を購い、隣坊に宅を構えて焉を居く。偶たま貨物を他邦に輸るに、船は颶風に遭いて転覆し、数千金を沈没す。傭夫は金を偸んで逃亡し、小廝も衣食を窃んで去る。これより家産日に衰え、幾も亡くして巨室は他人の有と為る。

一老僕あり、主家の衰滅を歎き、将に旧業を挽回せんとす。東[26]台山下に術者[27]ありて、能く将来を知り、言う所は掌[28]を指すが如しと聞き、則ち往きてこれを問う。術者曰わく、「余、盛会の夜、偶たま其の門を過ぐ。一鬼の[29]牖より入るを見る、是れを瞰鬼と謂う。『高明の家は、鬼其の室を瞰う』と、是れなり。既に一たび鬼の瞰う所と為れば、遅速同じからずと雖も、衰え且つ滅びざるもの少なし。夫れ人の生は各おの天分あり。分を過ぎれば必ず禍を招き、全からんと欲すれば欠く。所謂人の世は欠[31]陥世界なり。物は安くんぞ全かる可けんや。古の人、屋を為るに三瓦を成さずしてこれを陳らぬ。完全を懼るればなり。今の人、勢[32]いを得れば則ち天に勝ち、天定まれば亦た人に勝つことを知らざるなり。聞く、欧州の富豪は、屋を造るに皆堅牢不燃の質を用い、三層或いは五層、七層八層に及び、人力の極むる所に至りて止むと。而れども災厄の多き、英の龍動を以て最もと為す。欧人は物理[33]に精しきも、未だ物理の外、別に微妙の天理[34]あるを知らざるなり。子は高野大師[35]の堂を築くの法を見ざるか。門楼殿宇、都て崇高を嫌い、宋[36]栂檐欄[37]も亦た雕絵[38]を去る。而れども千歳の久しき、災厄を免れて巍然として存するは、天理に順いて修造すればなり。彼の東寺の如き、屢しば兵燹[39]に罹る。然れども大師[40]の堂に於いては遂に一瓦をも捐せず。修造、宜しきを得ればなり。[41]明暦の災、幕府は五[42]層城楼を亡う。新井白石は議を献して遂に再び造らず。将軍の家と雖も、世々全福の人を生ぜざるなり。主と室と称わざれば、則ち禍を招くの本なり。況んや賈人、一時の暴富を得て、居室飲食、王侯貴人と同等ならんことを欲するをや。天理[44]を懼れず吾[45]が身を省みず、鬼の瞰う所と為るは、亦た宣なるかな。子は還りて主に勧め、一矮陋[46]の居を卜[47]して、節倹を専にし勉強を宗とし、多利を貪らず来客を欺かされば、又た応に先業を復すべし。若し行いこれに反せば、再び世に出づること能わざらん」と。僕、唯々として退く。主と謀りて術者の言の如くす。数年の後、旧に復すと云う。

夫れ徳[48]に吉あり凶あり。[49]吉人は吉徳を為し、凶人は凶徳を為す。鬼も亦た然り。吉鬼は吉人を護り、凶鬼は凶人を助く。然れば凶は吉に勝たず。吉鬼の護る所、凶鬼もこれを瞰うを得ず。[50]阿房の宮、[51]望仙の閣、吉鬼の棲息する所に非ざるなり。

東京は人家が密集しており、土地の値段も高い。家をかまえる人は高層を好む傾向がある。ひとりの大商人がいて、三階だての立派な家を新築した。レンガを積み重ねて壁をつくり、銅板で家根をふいた。宋（むなぎ）・栂（たるき）・店（たな）・楔（はしら）など、すべて良材を択んだ。窓・櫺（れんじ）・檐（ひさし）・欄（てすり）などは、雕りものに細工をこらし、帷（カーテン）・屏（ついたて）・榻（こしかけ）・卓（テーブル）などは、すべて洋風になぞらえた。花びん・暖炉・時辰盤（時計）・玻璃灯（ランプ）などは、質のうえでも見た目においても最高に美しく、もっとも新しくて高価な品物を張り合ったのである。竣功の日は、親族・友人・大工を集めて大宴会を開いた。昼も夜も飲みつづけ、ランプのともしびが美しく輝いて、その明るさは近所を照らすほどだった。

家の主人は客のもてなしに疲れ、酒もこれ以上飲めなかったので、手すりにもたれて涼を求めた。姿ははっきりしないが何か気配がして、主人に息を吹きかけたようであった。主人は初めこのことを極めて不審に思い、明かりを取って照らしてみた。結局何も見えず、猫が食べ物をとりに来たのだろうと思った。主人は席に戻って黙りこんだまま考えごとをしているようであった。客が

酒をすすめて言った、「どうしてふさぎこんで憂うつな顔をしているのか。もうひとたび音頭を取ってくれないか」と。主人は急に召し使いの女に命じて言った、「室内が少し淋しい気がする。すぐに芸妓を百人よびよせよ。酒のさかなも少し足りないので、料理人に命じて新鮮なものをさばかせなさい」と。そこでどっと三味線が鳴り歌が始まった。客たちは裸になって踊りだした。召し使いの女や男たちは怪しんで、「主人はふだんけちなのに、今日はどうしてこんなにぜいたくなのか」と思った。

何か気配がしてまた一人の客に息を吹きかけた。主人はこれを見てふたたび明かりを照らして捜し求めたが、あとかたもなかった。主人は心に嫌な思いが生じた。客がムッとしてののしって言った、「たまたま新築して酒宴を設けておりながら、どうして客をもてなす礼を尽くさないのか。肉はみな腐っているし、酒も濁っている。三味線の音はやかましいし、ランプのひかりもまぶしい。家は円盤のように動いて人にめまいを与える」と。突然、焼き物の皿を取って主人に投げつけ、そのひたいにけがをさせた。主人は激怒し、「このごうつくばりめ、まだ足りないと思うのか。足りないならこれを食らえ」とばかりに、こぶしを固めてほっぺたに打ちつけた。いならぶ人たちがさえぎろうとしたが、主人はふたたび酒だるでなぐりつけたので、相手の歯は折れ唇は破れ、気絶して倒れてしまった。客たちは怒ってこぶしで主人をなぐりつけた。主人は力持ちで、狂乱してみんなと争い、皿やはちを割り、ストーブをひっくりかえし、ランプの台を折ったりした。楽しい酒の席が、一変して闘争の場となってしまった。すぐに警官が現われてみんなをしばりあげた。何ヶ月も決着がつかず、主人は客にけがをさせたというので、金を出してつぐなった。妻は夫がつかまえられたのを嘆き、心に悩んだあまり病気となり、幾月も床にふした。息子は父の不在をねらって妓院(くるわ)にいつづけて帰らなかった。はては一人の女を身うけし、近所に家を構えて住まわせた。たまたま貨物を他国に運ぶのに、台風にあって船は転覆し、大金を沈めてしまった。店の使用人は金を盗んで逃亡するし、小間使いも衣食を盗んでいなくなった。これから家産は日ごとに衰え、まもなくして豪邸は他人の所有となったのである。

一人の年とった下男がいて、主人の家が衰滅していくのを嘆き、昔の事業を挽回しようとした。上野のあたりに占者がいて、将来のことをいとも容易に言いあてると聞き、出かけていって尋ねることにした。占者が言った、「私は大宴会の夜にたまたま門の前を通りすぎた。一匹の鬼が窓から入るのを見たが、これを瞰鬼というのだ。『富貴な家は、鬼が室内をうかがっている』とあるのがそうだ。いったん鬼にうかがわれることになると、遅かれ早かれ衰滅しない者は少ない。そもそも人はこの世に生まれて、それぞれ天分というものがある。分を過ぎると禍を招き、完全であろうとすると必ず欠陥が生じる。いわゆる人の世は欠陥世界なのだ。完全な物などあるだろうか。昔の人は、家根を造るのに瓦を三枚重ねずに(一枚ずつ)並べたものだ。完全であるのを恐れたのだ。今の人は、勢いがいいと天道に勝つこともあるが、天道が安定すると人に勝つものだということを知らない。私は聞いている、欧州の富豪は、家を造るのにみな堅牢で燃えない材質を用い、三層もしくは五層、さらに七層八層と、人力の極限に達して止めると。しかし災厄の多いのは、英国のロンドンが一番だ。欧州の人は物理に精しいが、物理以外に微妙な天然自然の道理があることに気づいていない。あなたは高野大師が御堂を立てる方法を見たことがないのか。門の楼閣や仏殿はすべて荘厳をきらい、

宋（むなぎ）・桷（たるき）・檐（ひさし）・欄（てすり）なども雕りものを取り去った。そうして千年もの長い間、災厄をまぬがれてしっかりと残っているのは、天道自然の道理に従って建造されているからである。あの東寺はしばしば兵火にかかっている。しかし大師堂となると、瓦一枚もそこなうことがなかった。建造が理に適っているからだ。明暦の大火のとき、幕府は江戸城の天守閣を焼失した。新井白石が建議してとうとう二度と修築することはなかった。将軍家でも代々幸福このうえもない人が生まれるわけではない。夫と妻とがつり合わなければ、禍を招くもとになるのだ。まして商人が一時の暴利をむさぼり、住居・飲食が王侯貴族と同等になろうと望むのはとんでもないことだ。天然自然の道理を恐れず、自分を反省せず、鬼にうかがわれることになるのは、当然のことだ。あなたは帰って主人にすすめて、一軒の粗末な家を求め、節約に心がけ勤勉につとめ、多くの利益をむさぼらず来客を欺かなければ、やがて昔の事業を回復できるだろう。もしこれと反対のことをするならば、二度に世に出ることはできないだろう」と。下男はハイハイと答えて退いた。主人と相談し、占者の言う通りにした。数年後にはもにもどったということだ。

そもそも徳には吉と凶とがある。吉人（善人）は吉徳（善徳）を行い、凶人（悪人）は凶徳（悪徳）を行う。鬼も同じである。吉鬼（善鬼）は吉人を守り、凶鬼（悪鬼）は凶人に手をそえる。だから凶は吉に勝てないのだ。吉鬼の守っているところは、凶鬼もうかがうことができない。阿房宮や望仙閣は、吉鬼が棲息するところではない。

註

(1) 稠密―ひところに密集すること。
(2) 層楼―たかどの。
(3) 高厦―厦は大きな家。
(4) 甎―敷き瓦のことだが、ここではレンガの意。
(5) 雕画―彫琢に同じ。きざみえがくこと。
(6) 時辰盤―時辰儀に同じ。時計のこと
(7) 玻璃灯―洋灯に同じ。ランプのこと。
(8) 尽善尽美―『論語』八佾篇に、「子、韶（舜の朝廷で作曲された音楽）を謂う、美を尽くせり、又た善を尽くせりと」とある。朱子は『論語集註』に、「美は声容の盛、善は美の実なり」と註している。美は外面的な美しさ、善は内面的な美しさをいう。
(9) 竣功―竣工に同じ。工を竣えること。
(10) 盛讌―讌は宴に同じ。盛んな酒宴のこと。
(11) 卜昼又卜夜―『春秋左氏伝』荘公二十二年に、「（敬仲）桓公に酒を飲ましむ。（桓公）楽しむ。公曰わく、火を以てこれに継げ（明かりをともして夜も飲みつづけよう）と。（敬仲）辞して曰わく、臣はその昼を卜し、未だその夜を卜せず（私は昼のことを占って吉とでたので酒宴を開きましたが、夜のことまでは占っていません）」とある。「瞰鬼」の本文では、昼夜を問わず飲みつづける意。
(12) 煜々―ピカピカと光り輝くこと。
(13) 不勝杯杓―『史記』巻七・項羽本紀第七に、「張良、入りて謝して曰わく、沛公、杯杓に勝えずして、辞すること能わず云々」とある。

(14) 吹気―葛洪『神仙伝』に、「(劉政) また能く気を吹き、砂を飛ばし石を揚ぐ」(『太平広記』巻第四所収) とある。
(15) 鬱陶―鬱陶 (うつよう) は、鬱陶 (うっとう) とも訓じる。陶は憂えるさま。
(16) 肴核―魚と果実。酒のさかなのこと。蘇軾の「前赤壁賦」に、「肴核既に尽き、杯盤狼藉たり」(『古文真宝後集』) と、ある。
(17) 嬌泰―おごりたかぶること。嬌は驕に通じる。嬌泰は、ここではぜいたくの意。
(18) 勃然―『孟子』万章章句下に、「王、勃然として色を変ず」とある。顔色をサッと変えるさま「笑鬼」訳註 (本誌第二一巻第二号、一九九九年十月) の註 (30) に既出。
(19) 運転―『荘子』(外篇) 天運篇に、「意者は其れ機緘 (からくり) 有りて已むを得ざるか、意者は其れ運転して自ら止まること能わざるか」とある。運転は運動に同じ。動きだすこと。「瞰鬼」の本文では、レンガ造りの三層の建物での宴会のために、目がまわっている意に解した。
(20) 老餮―老いて餮ること。貪欲の意。
(21) 暈絶―暈は目がくらむこと。気絶の意。
(22) 膂力―膂(背骨) の力のこと。筋骨たのもしい力持ちの意。
(23) 火炉―原文には「火炉」とルビがふられているが、ここではストーブの意に解した。
(24) 灯台―ともしびをかかげる台のこと。ここではランプの台の意に解した。
(25) 時父不在家―『論語』陽貨篇に、「陽貨、孔子を見んと欲す。孔子見ず。(陽貨、) 孔子に豚を帰る。孔子、其の亡きを時として往きてこれを拝す (陽貨の不在をねらってお礼に行った)」とある。
(26) 東台―東叡山 (東の比叡山の意) のこと。東京上野の寛永寺の山号。
(27) 術者―易者。
(28) 指掌―『論語』八佾篇に、「或ひと禘 (周の天子の行う祭) の説を問う。子曰わく、知らざるなり、其の説を知る者の、天下に於けるや、其れこれをここに示るが如きかと。(孔子) 其の掌を指す」とあり、『礼記』仲尼燕居篇にも、「子曰わく、郊社の儀・嘗禘の礼に明らかなれば、国を治むること其れこれを掌に指すが如きのみなるか云々」とある。自分の手のひらを指すように簡単なこと。
(29) 鬼―鬼は本来死んだ人や祖先の霊魂を指していう。鬼神・幽鬼の意。詳しくは「哭鬼」訳註 (本誌第一九巻第二号、一九九七年十月) の註 (4) を参照。
(30) 高明之家、鬼瞰其室―前漢末の思想家揚雄 (前五三―後一八) の「解嘲」に、「高明之家、鬼瞰其室」とあるのにもとづく。「解嘲」は、不遇の異才であった揚雄が、世人のあざけりから自己を弁明するために作った一篇である。『漢書』巻八十七下・揚雄伝五十七下、『文選』巻四十五・設論、『続文章軌範』巻一などに収められている。高明富貴な家は、常に鬼神がうかがっており、その繁栄をにくみ厄害を加えることを述べたものである。これはもともと『易経』謙の卦・彖伝に、「天は盈 (満てるもの) を虧きて謙 (足らざるもの) に益し、地道は盈 (高い山) を変じて謙 (低い谷) に流き、鬼神は盈 (おごる者) を害して謙 (へりくだる者) に福し、人道は盈 (おごる者) を悪みて謙 (へりくだる者) を好む」とあるのに由っている。物事はすべて陰陽消長の理に従わない

ものはないから、常に謙虚であってこそ終わりを全うすることができることを述べたものである。この占者は石川鴻斎自身と言ってよい。

(31) 欠陥世界―この世界は完全無欠ではないこと。『宋史』巻二百八十二・列伝第四十一の李沆伝に、「但だ念うに内典はこの世界を以て欠陥と為す。安くんぞ円満なること意の如く、自ら称い足るを求むるを得んや」とある。内典とは仏典のことで、欠陥世界は空の思想にもとづいた仏教の世界観である。明代の王陽明の高弟王龍渓(一四九八―一五八三)も、「吾人の処世、豈に能く事々平満にして不足の嘆なからんや。縁に隨いて順応するに貴ぶ所は、これに処するに道あるのみ。禅家これを欠陥世界と謂う」(『王龍渓先生全集』巻一・三山麗沢録)と述べている。

(32) 得勢則勝天、不知天定而勝人―『史記』巻六十六・伍子胥列伝第六に、「吾これを聞けり、人衆ければ天に勝ち、天定って亦た能く人を破る」にもとづいたもの。

(33) 物理―もともと朱子学の用語で、人間界や自然界を問わずすべてに天然自然の道理や倫理があることを意味したが、今日でいう「物理学」の意味に解せられるようになっていったのは、江戸時代後期から明治初年にかけてである。このあたりの事情は、鈴木修次著『文明のことば』(文化評論出版社、昭和五十六年)の「心理と物理」の項に詳しい。「哭鬼」(本誌第一九巻第二号、一九九七年十月)の註(42)にも、窮理を物理学の意味に解したので参照のこと。

(34) 天理―『礼記』楽記篇に、「好悪、内に節なく、知、外に誘わるれば、躬に反る能わずして天理(天から与えられた本性)滅ぶ」とあり、『荘子』(外篇)天運篇に「夫れ至楽は、先ずこれに応ずるに人事を以てし、これに順うに天理(天地自然の理法)を以てす」とある。天理とは、『荘子』(内篇)養生主篇に、「天理(自然本来のすじめ)に依りて云々」とあるように、料理人が牛の体にある自然本来のすじめに従って刃をあてるという技を披露しているところに由来している言葉である。これは古来より中国・朝鮮・日本に共通した「天」への篤い信頼のもとに成り立つ伝統思想である。ここでは天然自然の道理と訳した。

(35) 高野大師―空海の諡号。弘法大師に同じ。

(36) 雕絵―雕画に同じ。註(5)参照。

(37) 巍然―山の高いさま。ここでは建物がしっかりと立っていること。

(38) 東寺―教王護国寺のこと。弘法大師信仰のひとつの中心地。

(39) 兵燹―燹は野火。兵火のこと。

(40) 大師之堂―弘法大師空海を祀る堂のことで、真言宗では御影堂ともいい、東寺と高野山との二堂が著名である。石川鴻斎がここで述べている大師堂は、ひろく真言宗の寺院で空海の像を安置している堂を指しているのであろう。

(41) 明暦之災―明暦三年(一六五七)正月十八日から十九日にかけて、江戸で発生した三つの大火を総称して「明暦の大火」とよぶ。

(42) 五層城楼―江戸城の天守閣は概観が五層であった。明暦の大火により、江戸城は天守閣をはじめ本丸・二ノ丸・三ノ丸が焼け、西の丸の殿舎のみが残った。

(43) 新井白石献議―天守閣のみは幕末に至るまで再建されることはなかった。新井白石(一六五七―一七二五)は、自伝の

「折たく柴の記」において、正徳元年（一七一一）十二月二十二日、将軍家宣に防火対策として十五条を建議している。鴻斎はそのことを指して言ったものか。

(44) 不懼天理―『論語』季氏篇に、「孔子曰わく、君子に三畏有り、天命を畏れ、大人を畏れ、聖人の言を畏る」とある。朱子は『論語集註』に、「天命とは、天の賦する所の正理」と註しているように、天命（天の命令）も天理（天の正理）も本質的には同じである。

(45) 不省吾身―『論語』学而篇に、「曾子曰わく、吾、日に三たび吾が身を省りみる云々」とある。

(46) 矮陋―小さくてむさくるしいこと。

(47) 卜一矮陋之居―『史記』巻四・周本紀第四に、「武王これを営み、成王、召公をして居を卜せしめ、九鼎（天子の宝）を居かしむ」とある。卜居は、占って住居を定めること。

(48) 徳有吉有凶―韓愈の「原道」（『朱文公校昌黎先生集』巻十一・雑著）、「仁と義とは定名たり。道と徳とは虚位たり。故に君子・小人有りて、徳に凶有り吉有り」とある。これは『春秋左氏伝』文公十八年に、「孝・敬・忠・信を吉徳と為し、盗・賊・蔵・姦を凶徳と為す」にもとづいたものである。

(49) 吉人為吉徳、凶人為凶徳―『書経』泰誓中に、「我聞く、吉人は善を為すに惟れ日も足らず、凶人は不善を為すに亦た惟れ日も足らず」とあるにもとづいたもの。

(50) 阿房之宮―『史記』秦始皇帝本記第六に、「宮を阿房に作る。故にこれを阿房宮と謂う」とある。秦の始皇帝が作った宮殿。

(51) 望仙之閣―南朝の陳の後主（陳叔宝）が建てた三閣のひとつ。『陳書』巻七・列伝第一の張貴妃伝に、「至徳二年（五八四）、乃ち光照殿前に於いて、臨春・結綺・望仙の三閣を起つ」とあり、その荘麗さは近古いまだあらざるところと言われた。臨春閣にいた後主は、渡り廊下をつたって寵愛する張貴妃の住む結綺や孔貴嬪・龔貴嬪の二貴を置いた望仙閣へと気のむくままにゆききした。

平成十二年五月八日受理

うしお・ひろたか

Translation and annotation of Kanki (瞰鬼)
— Ishikawa Kōsai (石川鴻斎)'s Yasōkidan (夜窓鬼談) —

Hirotaka Ushio